

## 1 授業の実際

(1) 見付けたことをペアで自慢し合ったり、感想を伝え合ったりする。

前時に書いたワークシートを基に、自分が育てている生き物を見せながら、ペアの友達に「見付けたこと自慢」をしていった。「ご飯をいっぱい食べる」「かくれんぼが得意」「石をいろんな所に動かすから力が強い」「目がめっちゃくちゃかわいい」「ジャンプ力がすごい」など、見付けたことを伝えたり、それを聞いて感想を伝え合ったりした。「いっぱい」「得意」



「強い」「かわいい」「すごい」という言葉に「生き物への愛着」が表れていることを感じた。しかし、ワークシートを見ながら伝えたり、伝え合うことの必要感を感じていなかったりする姿もあり、子どもによって伝え方や聞き方に差があるように感じた。伝え合う意味を子どもたちが感じるように場の設定をより工夫する必要がある。(創出)

(2) 交流しての気づきを全体で伝え合う。

友達の自慢を聞いて思ったことを全体で交流すると、「食べ物」に関する発言と「様子」に関する発言が出た。本時では、生き物の立場に立った関わりに気付いてほしいと考えていたので、「食べ物」に関する発言を基に、以前と今とで餌を変えたという世話の仕方の変化に着目させるようにした。更に、変えた理由を想像するように全体に促した。「いろいろな味があった方がいい」「生き物が飽きちゃう」「ぼくたちだって毎日同じ物だと嫌だ」という意見が出、生き物にも気持ちがあることを考えることができた。しかし、子どもの発言をつなげて気付くことができるようにするというより、子どもの発言を基に切り込んでいったので、子どもの思考の流れをより考えた授業展開を行っていく必要があると感じた。(受容)

(3) これまでの世話を振り返り、これからの関わりについて考える。

これまでも生き物の気持ちを考えて世話をしていた人はいるか尋ねると、多くの子どもたちが挙手をした。一人の子どもが「ザリガニの隠れ家を石からプラスチックに替えたこと」を紹介し、「石がぶつかってはさみが折れないようにするためだ」と、生き物の気持ちを考えながら世話をしていることが分かった。生き物の気持ちを考えながら世話をすることはどういうことかより具体で考えることが、その後の生き物とのかかわりにつながっていった。(受容)

## 2 今後に向けて

生き物の世話を毎朝行ってきた子どもたちの多くは、生き物の様子や変化に自然と目を向け、生き物の立場に立った関わりを考えながら世話をすることを何気なく行っていた。そのことに気付くように、本時では、世話の仕方の変化に着目し、その理由を問うという支援を行った。生き物にも気持ちがあることを意識した子どもたちは、次時からより生き物の立場に立った関わりをするようになった。また、これまで生き物の気持ちを考えたことがなかった子どもも、世話の仕方を変えていくようになった。

2回目の「見付けたこと自慢」では、自慢する内容を「生き物の気持ちを考えた世話の仕方」とより焦点化し、「食べ物」「部屋」「触り方」「他にも」と項目を決めてワークシートに書くようにした。食べる早さや量からより好きな食べ物を見付けたり、温度に合わせて生き物が自分の居場所を選択できるようにしたりと、より生き物の立場に立った関わりを考えて世話をする様子が表れた。

比較や多角的な見方など、理科や社会科につながる力を意識しつつも、「生き物への愛着」という生活科ならではの見方・考え方が大切なのだと改めて感じた。今後は、より子どもの必要性や思考の流れを意識した授業を行っていきたい。